



TITLE:

グリゴリー・ポメランツの研究: 「 深淵」思想を中心に

AUTHOR(S):

丁, 韦尼阿明

CITATION:

丁, 韦尼阿明. グリゴリー・ポメランツの研究: 「深淵」思想を中心に. 2015年度京都大学
南京大学社会学人類学若手ワークショップ 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショ
ップ報告論文集 2016: 87-87

ISSUE DATE:

2016-06-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/215807>

RIGHT:

グリゴリー・ポメランツの研究
「深淵」思想を中心に
テン ヴェニアミン (TEN Veniamin) *

本発表ではロシア思想家グリゴリー・ポメランツ（ロシア語：Григорий Померанц；英語：Grigory Pomerants）の思想と世界観を紹介する。とりわけ、ここでは彼の思想における「深淵」という概念に焦点を当てて論じてみたい。今日、グリゴリー・ポメランツに関する研究はほぼない状況にある。彼の多元論的な思想と世界観は現代ロシア思想史において重要な位置を占め、今日のグローバルな問題に対する新しい観点を与える可能性があるかと筆者は考えている。

まず、グリゴリー・ポメランツ（1918-2013）はソ連/ロシア思想家、学者、文化論者である。彼の人生は 20 世紀のロシア史上の中心的事件と強く結びついている—例えば、第二次世界大戦への参加、スターリン時代の強制収容所での生活、反体制的な活動への参加等を挙げることができる。また、ソ連時代の生き証人であるポメランツは、個人への様々な圧力があつた共産主義国家の中で、あくまで個人として時代の波を遅しく生き抜いた。このことが彼の人生に大きな影響を及ぼした。主に中国とインドの精神的な伝統に関連する学術的論文以外に、彼は歴史的、社会的問題に関するエッセイを多数書いた。

次に、ロシア文学における「深淵」という概念の歴史について簡単に言及したい。ポメランツによれば、「深淵」というテーマは、18 世紀にロシア詩において謳われるようになったという。19 世紀の詩人であるフョードル・チュッチェフ（1803-1873）は静的比喻として使われてきた深淵を自身の詩において「外面的」深淵と「内面的」深淵という二つの側面から表現し、深淵の形而上学性を強調した。チュッチェフ以降は、レフ・トルストイ（1828-1910）とフョードル・ドストエフスキー（1821-1881）の散文において深淵は重要なテーマになった。チュッチェフ、トルストイ、ドストエフスキーの共通点は人間の理性では答えることのできない「未解決の問題」を提供していることである。

さて、ポメランツによれば、「深淵」への運動には三つの段階があるという。第一の段階は理性的世界に生きる不可能性である。すなわち、実証主義の世界と唯物論の世界に生きる不可能性である。第二の段階は超理性的な実在の偶然的、突発的な感覚である。ポメランツはこの感覚が禅の公案と類似していると指摘している。第三は超理性的なものとの安定的な接触であり、精神における浮揚である。この境地では全ての問題は不必要となる。

このように、ポメランツの「深淵」は静的比喻ではなく、むしろ潜在的な力を持つ非常に動的な概念であることについて述べた。彼の思想における深淵への運動は、人間を深層意識へとといざなうと同時に宗教精神的体験へと導くものである。

* 京都大学大学院 博士後期課程。